



コンサート・クリティーク

演奏会評

▲アレクサンドル・ヴェデルニコフ（ロシア・フィルハーモニー、◎木之下昇）

北海道、東北、関東、東京音楽界

オーケストラ

◆東京ニューシティ管弦楽団第 二十六回定期演奏会

この日の定期の前半はウクラ
イナの名ピアノリスト、ユーリ・
コートが常任指揮者、内藤彰と
ラフマニノフ／ピアノ協奏曲第
二番ハ短調を共演。冒頭は遅い
テンポでじっくり歌おうとする
のだが満ち溢れるものが少なく、
大味に聞こえ抒情性が出ない。
コートの音色はやや単調で剛直
なピアノだったがテクニクは
まずまず、コーダなど見得を切
るのは堂に入ったもの。アゲー
ジョはいささか冗長だったが、
フィナーレではピアノもロマン
ティックの極み、コーダは壮麗
で光輝に満ちていた。アンコー
ルにはコートが「ヴォカリーズ」
を呻くような弱音主体で演奏。
後半のブルックナー／交響曲
第七番ホ長調も内藤の誠実で銜
いのない流麗な指揮により、第
1楽章などやや細身だがリリッ
クな水準以上の美演。コーダは
鳴りが悪くトランペットが浮き
出てしまった。アゲージョも室
内楽的な秀演で第1主題部末尾
のクライマックスは金管を抑え
た弦主体の解釈になっており、
ハース版ながらティンパニのみ
使用していた。（6月24日、東京
芸術劇場）

（浅岡弘和）

◆読売日本交響楽団 第四〇六回定期演奏会

当夜は、常任ゲルト・アルプ
レヒトによる現代音楽プログラ
ム。シュニトケ、新作委嘱初演、
イサン・ユン、ライマンという
オーダーは実にユニーク。

前半の二作、シュニトケのバ
レエ音楽（ペール・ギユント）
から「エピソード」と、望月京
の（メテオリット）隕石群（
世界初演）では、切実さとは無
縁の浮遊感が主体的。梅雨時の
一夜には涼味が有るが、作品の
存在感は希薄。

後半は、まずイサン・ユンの
（韓国中央情報部によりスパイ容
疑で強制送還される直前の）名
作（礼楽）。ソツ無く演奏され
ていたが、ユン作品独特の崇高
な緊張と雅楽にも通じる音色を
もう少し表出させて欲しかった。
そして最後は、ライマンの（ヴ
アイオリン協奏曲）。ヴァイオ
リンとチェロを欠き、管には低
音楽器を多く配した特異なオケ
と独奏（渡辺玲子）のコントラ
ストは見事だったが、音楽自体
には惹かれない。渡辺のシンの
有る独奏には大拍手。（6月28日、
サントリーホール）

（松尾祐孝）